

# 浜松・三ヶ日 みかんの里協議会 静岡県浜松市

6次産業化 地産地消 環境保全 (農林水産業・食品産業)

**地域資源の再認識に建って、誘客事業、ビジネス促進を目的に広域連携体**

## 活動の経緯

そもそも平成の大合併以降、地元根付いた組織そのものは解体もしくは改修されて、浜松市という大きな単位で各地域は施策が図られていた。一方で、観光事業や中小企業活性は、細かく丁寧に地域に密着した形でなければ十分でないという意見が多く出されて、「地域に寄り添った自分たちに拠る」組織が必要となっていた。

## 活動の概要

地元資源の「MOTTAINAI」に投資し、今あるもので差別化戦略を図る。



MOTTAINAIから生まれた加工原料用みかん



みかんの花摘みツアー



浜名湖琥珀魚醤



三ヶ日牛を使った浜名湖琥珀牛醤の試み

## 活動の成果、実績等

静岡県三ヶ日町では、今から十数年前、町内の精肉会社の社長が、市場に出荷できない規格外の温州みかんを皮ごと丸ごと、酵素分解という手法で「液状化」し加工原料として販売することが始まった。以後、形が悪い、糖度が不足、色づきが悪い販売不適合品は、その液状化加工原料として高い値段で流通されるようになっていった。現在、このMOTTAINAIビジネスは、静岡県内の他のミカン産地と比べても、量と価格では圧倒的である。町内では、みかん農家は、完熟した色づいたみかんだけを掲載商品としており、みかんの花は、誰も収穫しない。しかし、世界中の香水原料の6割がみかんの花由来だということを誰も知らない。これもMOTTAINAIのである。毎年5月上旬、町内のみかん畑では、募った観光客に入ってもらいみかんの花を摘んでいる。アランビックという大型蒸留器で芳香蒸留水を抽出し、参加者が持ち帰るという事業を前から行っている。毎年50~100名、毎回違う地域に折込広告を出して誘客している。そもそもみかんの有名産地でありながら、みかんの花を香水原料として経済商品にしようと女性の声から始まった。

ここ数年来、浜名漁協は、頭の痛い問題にぶつかっている。それは、汽水湖である浜名湖の代表的な産物である「あさり」が獲れないのである。いくつかの理由はあるが、その一つに、放流する稚貝をクロダイが食べてしまい、何年も集荷量ゼロが続いたからだ。クロダイもなかなか売りづらい魚種であって、港で捨てるしかなかった。そこで協議会内部で、観光協会と漁協と水産試験場がタッグを組み、漁師が獲るクロダイを観光協会が買い上げ、特産品開発事業とした。作ったのは、「浜名湖琥珀シリーズ 魚醤」である。地元の観光ホテルの料理長の取り組みと、通常の魚醤には自然分解し発酵するための時間が必要であるが、先の酵素分解の技術をつかって、約半年弱で製造しようとしている。

また、みかんを牛に食べさせて健康的な牛を肥育するというキャッチフレーズで、三ヶ日牛というブランド牛が県内でもトップクラスの肥育数を誇っている。しかし、1頭の牛が「牛肉」になるためには、脂肪やスジをはじめ多くの端材が発生してくる。これもMOTTAINAIのである。植物性タンパク質の大豆や、動物性たんぱく質のクロダイから「醤油」ができるのであれば、牛肉からでも醤油ができるだろうと、「牛醤」の製造に今年とりかかっている。これが、シリーズ化する「浜名湖琥珀」の意味である。

上記の取り組みは、SDGsを意識することとなり、また他社競合ライバルのない新しい事業分野が存在することに地元が気が付いている。これは、莫大な投資を必要とせず、すでに足元にある「何か」に気づけばよいのであって、ビジネス化のリスクはかなり少ない。また観光客目線でいえば、地産商品であり、食育であり、海外展開へのビジネスチャンスでもあるかもしれない。